

錦織 亮介（芸術学）

黄檗禅林の絵画

日本美術史の形成と発展において、中国・朝鮮からの波状的な先進文化の移入とその受容の問題を検証することは、きわめて重要な案件である。本研究は、従来、実証的研究が放置されてきた臨済宗黄檗派の伝来を契機とする明清美術の日本への移入とその受容の様相について、絵画を中心に網羅的な作品調査を行い、年代を定め、制作の担い手であった画家の実態や黄檗の諸祖師をふくめた文化的環境との関係を明らかにした労作である。

本研究の第一章では、まず、黄檗派の頂相に見られる顔の陰影表現の淵源を、明末にマテオ・リッチによって伝えられた西洋画の陰影法が、文人社会を中心とする世俗肖像画の曾鯨やその一派の活動を通して、伝統的な線描主義との折衷技法として定着する過程に求めうることを実証している。また日本における黄檗肖像画家の系譜が、中国画人の楊道真から、日本画人の喜多長兵衛道矩と宗雲、さらに長兵衛の息子の喜多元規へと引き継がれていく過程を、300点を超える作品の実査から丹念に跡づけて従来の諸説を修正し、あわせて各画家の肖像表現の特色を、外来表現の日本への伝播、中国文化の受容という観点から、実証的に明別している。とくに、喜多長兵衛と宗雲との別人説、喜多元規の作風変化の理由として、画家の出自や世代にとどまらず、長崎と京都という画家の活動拠点の文化的背景の違いが大きく作用していることを明らかにした点は、本研究の卓見である。

第二章では、黄檗派の周辺で制作または鑑賞された道釈人物画について、長崎派の派祖とされる画僧逸然の画業を網羅的に紹介し、あわせて逸然が規範とした日本伝来の中国画人陳賢の諸作例を、明末画壇の動向の中に定位する。第二章でも、数多くの新出資料を含めた200点を超える作品の実査に立脚しつつ明清絵画との結びつきを検証し、また近世絵画史を俯瞰する視点から、黄檗道釈画のもつ新来の唐絵としての意味と機能を論証している。

第三章では、従前の論述を踏まえつつ、総合的な観点から、黄檗の美術が、日中双方の美術史の境界に位置しながら、拠点を長崎から京都へ移す過程で、長崎と京都との地域的差異を含みつつ、明末画壇を濃厚に反映した様式から、近世的な日本化された様式へと移行する過程を検証している。

本研究は、作品調査による新知見に溢れているばかりでなく、作品解釈の枠組みにおいて東アジア的視点を導入する一方、日本国内での動向について、多様な中国出身者の地域社会が交錯する長崎や日本の伝統文化の中心にあった京都において、それぞれの場における黄檗寺院をとりまく文化的環境の違いを考慮した入念な分析を併行させることで、黄檗絵画の諸相を、生きいきとした歴史の証言者として蘇らせている。本研究が、近世絵画史における基礎資料として、また多様性と可変性をもった近世絵画史の構築をめざす業績として、さらに東アジア絵画史のよき実践として、高く評価される所以である。

よって本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであると認めるものである。